

## 南国の光と闇の狭間で

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

映画は社会を映す鏡ということ、最近の特にイタリア映画などを見てみると実感する。イタリアの置かれた現在が、映画の登場人物や物語から立ち上がってくる、と言うと大げさだろうか。例えば、今月のこの作品だ。

舞台は、南イタリアのシチリアから遠く離れた小さな島。かつて栄えた漁業は衰退の途をたどり、今は夏の観光光業の比率が高まっている。

父を海で亡くしたフィリップは二〇歳。祖父エルネストと母ジュリエッタとの三人暮らしだ。代々漁師をやってきた一家で、七〇歳のエルネストとフィリップは今も一緒に海に出る。衰退する一方の漁業に見切りをつけて観光光業に転じた叔父ニーノは、船を廃船にして祖父に引退を勧めているが、海の男の誇りが許さない。一方、ジュリエッタはフィリップとふたり本土に渡り、新生活を始めたいと願っている。

夏、島は観光客で活気づく。フィリップ一家も家を改造して観光客にレンタルし、家族はガレージで暮らすことに。フィリップは船着き場で知りあった若い男女三人組に部屋を貸し、案内も同世代同士でうきうきと楽しい。三人組の女王様の存在のマウラとも打ち解けた。

ある日、祖父と漁に出たフィリップはアフリカからやって来たらしい難民のボートに遭遇、助け上げる。しかも、その中の大きなお腹を抱えた女性サラとその息子を自宅のガレージに匿う。その夜、サラはジュリエッタの助けで無事出産する。しかし、不法難民を匿うことがいかに一家の生活を脅かすことになるか、ジュリエッタは怯える。果たして翌日エルネストの船は不法入国幫助の罪で警察に差し押さえられる。島の漁師たちは、この問題について話しあうが、それぞれの置かれた状況により賛否、意見は食い違い、かつてのよ

うな仲間意識ではくれない時代の流れを噛みしめる。

ジュリエッタからもサラたちを警察に引き渡すべきだと迫られ、エルネストはなぜ人助けをすることが罪になるのか、人間の基本的価値観の変化に釈然としない。サラは、ジュリエッタにエチオピアから二年かけてここまでたどり着いたこと、夫がいるトリノまで子どもを連れて何としてでも向かいたいと語る。二人の母親は、それぞれに立場は違いますが、子どもの将来のために今の場所からより良い場所に出たいとの願いをもつ。ジュリエッタは、サラを疫病神に思える一方、同じ子を想う母親同士として、追いつくこともできない。サラ役のティムニット・Tは、実際にエチオピア難民で、ボートで国を出たときには八〇人いたうち生き残った三人のうち一人で、映画づくりのための取材を受けた際に自ら出演を志願したという。言葉少ないが、美しさと威厳のあるアフリカの女性像として強烈な印象を残す。その夜、マウラを連れてロマンチックな夜の海に出たフィリップだったが…。

美しい海を舞台に、天国のようなバカンスを楽しむ者と地獄ともいえる冷酷な法的処理に泣く難民。フィリップはある決意を胸に、立ち上がる…。



### 『海と大陸』

イタリア映画 (93分)

監督: エマヌエーレ・クリアレーゼ

出演: フィリップ・ブチッロ、ドナテッラ・フィノッキアーロ、ミンモ・クティッキオ、ジュゼッペ・フィオレロ、ティムニット・T

公開中